

—— 仏様曰く、所帯を持つと劍の切れ味が下がるらしい。

おそらく劍士は孤高、己の劍のみを考え続けるべし、という事なのだろう。

僕がいた国の漫画やアニメでは「守るものがいた方が強い」とよく言われていたものだけど、劍の道というのはどうやらもつとスティックなものらしい。

そんなわけで、僕は早々に恋を諦めた。

勿論泣く泣くではあった。僕だって男の子だ、失恋に涙することだってある。でも、それ以上に守りたいものがあった。

—— 永劫に続くような、一度きりの劍戟。

あそこで見た、彼女の劍筋を、その煌めきを失ってほしくはなかった。

あの尊さを前にすれば、僕の淡い恋心なんでもは無価値に等しい。

だから、僕は諦めた。

諦めたというのに……。

「ま、マスター？」

新幹線にて、頬杖を突きながら車窓から街を眺め続ける僕に、隣に座っていた彼女は不安そうに問うてきた。

「その……なんか怒ってない？」

「怒ってない」

「ホントに？」

「ほんとに」

『「一人で食べよ』って言って買ってきたお団子一人で食べちゃったから？』

「……それは別にいいよ。おかわりが欲しかったら買ってきてもいいから」

「ふふ、ありがと、マスター」

こちらの言葉に気持ちの良い笑みを浮かべる彼女、宮本武蔵を僕はただただじつと見つめる。

日本でも特に有名な剣豪にして、僕の大事なサーヴァント、そしてお恥ずかしながら僕の想い人である彼女は、やがて申し訳なきそんな笑みを浮かべてみせた。

『「それ』はいい、って事はやっぱり何かしたんだよね、私。ごめんね。この時代に来るのは初めてで……それにちよつとはしゃいじゃってるかなーって自覚もあ

ってですね……」

でへへ、と困ったように笑う武蔵ちゃん。可愛い。いやそうじゃない。今は彼女に見惚れる時じゃない。

「教えてほしいな。ワガママかもしれないけど、君に嫌われたくはないから」

「……じゃあ聞くけど」

浅く溜息を吐いてから、僕は彼女を横目で見ながら告げた。

「……なんでついてきたのさ」

「へ？」

「カルデアを出て、おおよそ一般的な日常に戻ろうとする僕に、どうしてついてきちゃったのさ、武蔵ちゃんは」

問うた僕に、武蔵ちゃんは目をぱちくりとさせながら、

「それは……君に、ついていきたくかったから、だけど」

頬を赤く染めながら、ぼそりと告げた。

「サーヴァントなんて必要ないような普通の生活に戻るって言ったよね僕」

「それは分かってます」

「護衛もいらないうて」

「それも知ってる」

「……じゃあなんで来たのさ」

「……君に、ついていきたかったから」

「……剣の切れ味、下がるんじゃないの？」

「……………」

無言。

しかしこのタイミングでの沈黙は最早回答に等しい。

「僕は君の剣筋が好きだよ、武蔵ちゃん。失ってなんかほしくないんだ。だから……」

言葉を紡ぐ僕に、

「だったら断ればよかったでしょ」

「え？」

武蔵ちゃんは珍しく不機嫌そうに、どこか拗ねたように僕を半目で睨んでいて。

「私についてきてもらいたくなかったのなら断ればよかったじゃない。了承してお

いて後でぐちぐち言うの、かつこ悪いと思うな」

「う……それは、そうだけど……」

「そこまで考えてたのに、どうして○×出したの？ マスター」

「それは……」

「私が答えたんだから、君もちゃんと答えて」

「……分かった」

真剣な声音に、白旗を上げる。

言いたくはないけど、今の彼女から逃れるのはビーストを倒すよりも難しいだろう。

仕方ない、と内心溜息を吐いて、

「……君に、ついてきてもらいたかったから」

僕は、心の内を告げた。

「護衛もいららないの？」

「はい……」

「サーヴァントなんて必要ないような普通の生活に戻るの？」

「はい……」

「私についてきてもらいたかったと」

「その通りです……」

頬を赤くしながら俯くこちらに、武蔵ちゃんほうん、と頷いて、

「……ごめん向こう向いてて。見せられない顔になってる」

「今更でしょ……」

「えっ!?!」

「にやけ顔くらい何回も見たよ僕」

「ぐう……」

真っ赤な顔をしかめようとさせながらもにやけが止まらない天下の宮本武蔵氏。相も変わらず免疫がなさ過ぎる。僕が言えた事ではないけど。

「せっかく君をねちねちと弄り倒せる機会なのに、嬉しくてそれどころじゃない……」

「…」

「そんな機会は遠慮なくスルーしてほしい……」

「だ、だいたい！ 君がついてきてほしくて私がついていきたいなら丸く収まって

るじゃない！」

「いやだから剣の切れ味が下がるって君が言うから……剣士心を分かるようにって言うから……」

「それはそうなんだけど……」

ううむ、と悩める武蔵ちゃん

「……つまり、私の事を第一に考えて身を引いてくれたけど想いは抑えきれなくて私の同行を許可しちゃったって事よね？」

「なんで要約したのやめてよ僕が恥ずかしくなるじゃないか」

「君は本当に優しいよね。そういうところも、まあ、うん、いいなって言うか、うん」

「そこは素直に好きって言うていいんじゃないかな……」

「それは剣士的にちよつと」

「剣士判定がガバガバすぎる……」

げんなりする僕に、武蔵ちゃんは頬を赤らめながらうん、と頷いて。

「よし。じゃあ喧嘩両成敗ってことで。はいこの話終わり。楽しく道中を過こしましよう！ すいません団子くださいーい！」

「いやまだ話終わってないから。話終わるまで団子も禁止」

「マスターの鬼……」

「鬼でもなんでもいいから。……真面目に言ってるんだよ、武蔵ちゃん」

頬を膨らませながら涙目で睨みつけてくる武蔵ちゃんに、できるかぎり真剣そうな表情を浮かべながら告げる。

「僕はその……君が好きだ。惚れてしまつてると言つてもいい。でも、それと同じくらい、君の剣が好きだ」

それはあの並行世界で得た感情。

ただ一度の奇跡の剣戟。

輝かしい彼女の剣筋を、僕は何よりも尊いと思った。

「君には君の道を進み続けてもらいたいし、君の剣を失ってほしくない。だから……」

……

「……マスター」

言葉が続けようとした僕を、武蔵ちゃんはさえぎった。

そして、穏やかに笑みを浮かべてみせた。



「まずは、そこまで強く、私の事を想ってくれてありがとう。それがすごく嬉しい。でも、安心して？」

微笑みかけ、そして彼女は、

「空の座と君への想い。私は、どっちも取るから」

そんな、途方もない事を告げた。

「私にはこれまで空の座を目指す事しかなかったけど、今はそれと同じくらい、君との日常に焦がれてる。優しくして勇気のある君と、一緒にいたいと思ってる。……剣を諦めたわけじゃない。でも、君への想いも諦めたくない」

「武蔵ちゃん……」

「まあ、ここで君が一思いにフってくれるなら、私は泣く泣く失恋した可哀想な乙女として旅に出ますけど」

「……君のためなら、そのぐらい」

「待つて待つて待つて。えっこの流れで？ この流れでふる？ 普通そこは根負けするところじゃないの？」

「君の想いは嬉しいけど……君の歩みに、僕は不要でしょ？」

「……君は、私と一緒にいたくないの？」

「……いたいけどさ」

「じゃあ決まり。はい終了。団子くださいーい！」

「ちよつと武蔵ちゃん」

「決まりよ、マスター。私はどっちも取る、君は私といたい。ならそれで話は終わり。……私はちゃんと自分の選択に責任を持つから」

「……………」

彼女の言葉に、言葉を無くす。

僕はどうやら、領分を誤つたらしい。

「…………ごめん、調子に乗つてた。君の歩みは、君が判断するべきだったのに」

「うん、分かればよろしい。まあ先に言ったのは私だから、お互い様ってことで  
そう言いながら、武蔵ちゃんは団子を差し出してくる。

「ほら、マスター。一緒に団子食べましょう？ これからの二人の幸福を祈つて  
乾杯じゃないんだから……」

苦笑しながら僕はその団子を受け取ろうとして、

「……何、それは渡すフリなの武蔵ちゃん」

「あ、いや、そうじゃなくて……あ、あーん……」

「剣士心……」

「どっちも取る！ どっちも取るから！」

「……君がいいならいいけど」

頬を赤らめながら口を開けると、武蔵ちゃんはそれはもうひどく震える手で僕の口へと団子を運んだ。

「あむ……」

「お、おいしい？」

「まあ市販の団子だなんて感じ」

「うー……」

「……おいしかったよ。武蔵ちゃんに食べさせてもらったから」

「そ、そっか！ でへへー、一回やってみたかったのよねこういうの！」

何とも幸せそうな武蔵ちゃん。大丈夫かなあこれ。剣筋乱れまくってないかなあ。不安しかない。

……でも、まあ、うん。

彼女がそれを選んだのだから、僕はそれを尊重しよう。

彼女の意志と、彼女の幸福を、僕は何よりも尊重するでしょう。

うん、と頷いて僕は彼女に声をかけた。

「武蔵ちゃん」

「何？ マスター」

「次は僕がやるよ」

「へ？」

「ほら、あーん」

「!? えっ、いやっ、そういうのはちよつと剣士的にアウトというか、供給過多と  
いうかですね!?!」

「口開けて。マスター命令だから」

「……命令なら仕方ない」

うん、と頷き武蔵ちゃんは口を開ける。なるほど、逃げ道を作ってあげればいい  
わけか。これから活用するでしょう。

「あ、あー……」

「ふふ、武蔵ちゃん顔真っ赤」

「斬りたい。いや斬る」

「照れ隠しが惨すぎる……」

冷や汗を流す僕の眼前、武蔵ちゃんは頬を真っ赤にしながら「うー……」とこちらを睨んでいて。

「……武蔵ちゃん」

「何？ 意地悪マスター」

「好きだよ」

「へっ!？」

「はい、あーん」

「むぐっ」

可憐な想い人に団子を食べさせながら、僕は胸の内が彼女への想いでいっぱいになるのを実感した。

彼女が目指す空の座。

そこは、誰かへの想いを持ちながら至れない場所なのかもしれない。  
それでも、彼女なら。

宮本武蔵なら、きつと。

「……まふたー」

「ん？ ……うわっ!？」

ふと顔を向けたその瞬間、彼女は勢いよくこちらに抱きついてきて、

「んっ!」

「んむっ!？」

唇を押しつけ、半分となった団子を押し込んできた。

「……何してるのさ剣士」

「……お返し」

「押し売りじゃなくて？」

「私をからかうのが悪いのです！ あんまり舐めると怒るからね？」

「ごめん、気をつけるよ。……これからよろしく、武蔵ちゃん」

微笑みかけた僕に、武蔵ちゃんもまた微笑んで。

「……ええ、マスター。どうぞ幾久しく、なんて  
そう、照れ臭そうに笑うのだった。」

これは、そんな話。

彼女と僕の、ありふれた日常の記録。

「……ファーストキスが団子って剣士的にどうなの」

「え？ あー……実はさっきの、ファーストキスじゃなかったりするのです……」

「え？」

「君の寝顔を見てたら、つい魔が差して……」

「嘘でしょ二天一流……」

「ごめんなさい……」

「……別にいいけど」

「……今、やり直す？」

「いやちよつとここ新幹線だし」

「部屋に着いてからならいいんだ」

「う……」

「私も着いてからの方がいいかな。……初めては、ちゃんとしたいし」

「……結構乙女だよね武蔵ちゃん」

「そ、そう？」

「勝手にファーストキス奪った点を除けば」

「本当にごめんなさい……」

「いやまあ、そこも可愛いなって思うけど」

「っ……マスター」

「ん？」

「やっぱり今じゃダメ？」

「……耐えて」

「はい……」